

# Swing Journal

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO JAZZ

## イーボ/イーボ・ペレルマン



①スレイブス・オブ・ジョー ②ホスタ・ルア(この道で)  
カーネーションとバラ ③エル・ディア・ケ・メ・キエラス  
いのとどく日 ④シランダ・ランゾーニヤ ⑤ナレゾー  
ジ・リエブス ⑥ボンタ・ジ・アレイア(砂の野)  
●イーボ・ペレルマン(ts) ドン・プレストン(p.synth) イ  
アース(p:④⑦) ジョン・パティトゥッチ(b:①~③⑤⑧)  
ユエル・ネイドリンガー(b:①~③⑤⑧) ピーター・アース  
ン(ds) アイアート・モレイラ(per) フローラ・プリム(m)  
1989年4月24日カリフォルニアで録音  
●キングレコード(King's Road) KICJ-19 ⑤Y2,500  
9月21日発売



青木



小川

### ブラジルとコルトレーンの融合が生んだ奇妙な花

ブラジルからファンタスティックなテナーの新人の登場だ。イーボ・ペレルマンは、サンパウロ生まれの今年29歳。ビル・ミルコフスキーは、アイラーと比較して紹介しているが、なるほどイーボのブレスのある部分はアイラーに似ているが、それよりもイーボ自身による晩年のコルトレーンに影響されているという見解の方が、このアルバムの内容を理解するための重要な鍵になるだろう。といっても、別にこの音楽があのコルトレーンの直接の影響下にあるというわけではない。イーボが過剰に発言しているように、彼はまた別のブラジルという音楽的な背景を背負っているという事実があり、このことをより注視したが、この音楽のアクチュアルなおもしろさとファンタスティックな魅力に正面から向き合えようと思う。つまり、ブラジルのあの豊かな音楽の世界が、コルトレーンの晩年のカオス的な音楽的なエネルギーにヒントを得て、今まで経験したことのない愛となって私たちの前に出現する。イーボは、「この第1作で自分がやりたいことの表面だけはひっかいたな」とひかえめに言っているが、しかし、この爪の先の手でさえ、しっかりリスナーにも伝わるだろう。現在注目をおびているさまざまなブラジルの作曲家の仕事や、あるいはサンバが伝えるあの魔術的な音楽の土壌が、コルトレーンを知るしたたかな奏者によって、また奇妙な花を咲かせたいというわ

### ズバ抜けた素質をもつ新人

メンバーからしてどんな音楽が飛び出てくるのか想像がつかなかったが、冒頭からかなりいい感じのコルトレーン・サウンドが鳴り出したことにはびっくりして嬉しくなってしまった。フューション系のミュージシャンが中心だが、①でもわかるように本作に取められたサウンドはかなりリズム感が高いというか、いわゆるイビート・ファンにも強く訴えるものを持っている。ブラジルということもあって、フローラやアイアートが加し、多くの曲をブラジルのわらべ唄で固めたこの作品からは、しかしそれでもなお強いジャズ感を感じずにはいられない。それはひとえにイーボのサクソフォンの響きが強烈なまでにコルトレーンスタイルを消化し、その上で自己のサウンドを追求しているからだ。サンパ的な③や軽いアップテンリズムを持った⑤などにおいてもそれはまったく漏れられていない。そこにサクソフォニストとしてのアイデンティティを示しているのがイーボのこの作品ではないだろうか。豪華なサイドメンにもかかわらず彼の演奏が一番印象に残っていることを考えれば、いかにこの新人がズバ抜けた素質を備えているかわかっていたただけだろう。完全に自分の歌というか声をサクソで獲得している姿を伝えるイーボのデビュー作にひとりでも多くの人々が耳を傾けてほしい。⑦の美しさと爽快な⑧など、新人らしからぬ充実した内容にまずは驚かされる